

2019年03月27日 3面

文字サイズ 小 中 大 [ブックマーク](#)  印刷 

大林道路ら3社／積載量表示ダンプを共同開発／過積載を防止、19年夏に販売開始

スケールダンプ  
(プロトタイプ)

大林道路、大煌工業（埼玉県川口市、山下将弘代表取締役）、極東開発工業（兵庫県西宮市、高橋和也社長）の3社は、積載量の計測・表示が可能なダンプトラックを共同開発した。車内外の重量表示計で積載量を確認し、過積載を防止する。積載能力をフル活用した運用が可能になり運搬効率の向上や、余剰な運行台数の削減も実現できる。今夏に販売を開始し、年間300台の販売を目指す。

開発した「スケールダンプ」は荷台下に計量装置、荷台前方と車内に表示計を搭載した10トンダンプ。10トン車であれば既存の車両にも装置を後付けできる。

ドライバーや積み込みの作業員が一目で積載量を確認できる。計量装置が荷台下に設置されているため、自重計よりも高精度な計量が可能。時速5～8キロの低速で走行しながら作業をしている時でも計測できる。

正確な積載量を把握することで、過積載を防ぐと同時に積載能力の上限まで活用できるようになり、効率的な運行が可能になる。過積載による道路の損傷や車両の劣化などの防止、運行の安全性向上にもつながる。

既に一部の現場に試行導入した。ドライバーからは「積載量がはっきり見えるため、安心して運行できる」との声が上がっているという。今夏の販売開始に向けて課題などを洗い出し、製品をブラッシュアップする。

従来は地上設置型のトラックスケールなどで計量しているが、トラックスケールがない現場もある。自重計での測定は測定方法によって数値のばらつきがあり、ドライバーの経験則や目視で積載するケースもあるという。目視による積載では余裕を持って最大積載量を下回る量を積載するため、ダンプの積載能力を最大限活用するのが難しかった。

[閉じる](#)

記事ID : 3201903270303

Copyright(C) 日刊建設工業新聞 記事の無断転用を禁じます